

知的障害特別支援学校中学部における参加を 高める授業づくり

—清掃場面における目的意識を視点として—

滝澤 健 ・ 合田 卓生 ・ 妹尾 恭子 ・ 山内 雅子 ・ 青井 香織
(附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校)

詫間 克久 ・ 川田 真司 ・ 田中 伸弥 ・ 坂井 聡*
(附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (附属特別支援学校) (特別支援教育)

762-0024 坂出市府中町綾坂889 香川大学教育学部附属特別支援学校

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Through a Match of a Consideration Cleaning Situation of Support Method to Raise Sense of Purpose in the Junior High School for Special Needs Education

Ken Takizawa, Takuo Goda, Kyouko Seo, Masako Yamauchi,
Kaori Aoi, Katsuhisa Takuma, Shinji Kawata, Shinya Tanaka and Satoshi Sakai*

Attached School for Special Needs Students in Kagawa University, 889 Ayasaka, Fuchu-cho, Sakai 762-0024

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 知的障害特別支援学校中学部の生徒4名について、活動への目的意識を向上させることを視点に支援を行った。二人組で行う清掃場面を取り上げ、目標確認場面、自己評価・他者評価場面を設定した授業展開の工夫と、手順や活動内容の視覚的提示、協同のための情報共有により、清掃に対する遂行状況が向上し、生徒自身が立てた目標の内容が具体的な達成基準を意識したものに変容した。

キーワード 知的障害特別支援学校中学部 清掃 参加 目的意識 協同

I. 研究の背景と目的

平成24年7月に中央教育審議会初等中等教育分科会から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」が示され、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきであること、その場合には、それぞれの子どもが、授業内容がわか

り学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けているかどうか、最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要であることと述べられている。この本質的な視点は、交流及び共同学習などの共に学ぶ場面だけでなく、日々行われている授業でも重要な視点であると考えられる。

また、特別支援教育の今日的課題のひとつに

キャリア教育がある。キャリア教育は、職業的自立のみをめざしたのではなく、より広義の自立をめざしたものであるという前提のもと、「児童生徒本人が経験する様々な物事との向き合い方に変化を促す教育である」(全国特別支援学校知的障害校長会, 2013)とされている。そこでは、「児童生徒本人が、授業をはじめ、学習上・生活上経験したことについて、『振り返り』を通して、言語化や文字化することにより、自分なりに意味付け・価値付け・重み付け・方向付けていくこと」(全国特別支援学校知的障害校長会, 2013)が重視されている。つまり、授業によって獲得される知識・技能だけではなく、その積み重ねによって形成されていく物事に対する姿勢、考え方、価値観といった内面の育ちを大切にされた教育であると言える。

本校中学部では、平成22・23年度に「主体的な社会参加をめざした授業づくりーポジティブな人間関係をはぐくむことを視点としてー」を研究主題とし、生徒の授業への参加を高めるための活動機会の設定と支援環境の工夫について明らかにした。授業進行や教材教具の準備片付け等、教師が行っていた活動を見直し生徒の役割として設定すること、やり取りの方法を視覚的に示したり、音声表出を補助するための携帯情報端末を工夫したりすることで、生徒同士のやり取りが促進されることが確認された(山内・坂井, 2010; 西部・山内・坂井, 2011)。

さらに、平成24・25年度には、「主体的な社会参加をめざした授業づくりー参加を高め知識・技能を活用する力を育むことを視点としてー」を研究主題とし、生徒の授業への参加機会を増やすだけではなく、参加の質を高めることにも注目した。導入時における学習内容の動画提示や、生活場面を想定したICカード教材等の工夫が生徒の意欲や課題解決の力を向上させることを確認することができた(山内・妹尾・田中・坂井, 2012; 山内・植村・詫間・坂井・宮崎, 2013)。実践を通じて、参加の質を高める授業改善の視点として、「活動への目的意識」「学びを深める協同した学習」「習得した知識・技能の活用」の3点が見出され、さらに活動機

会と支援環境の工夫を明らかにしていくことが課題となった。特に「活動への目的意識」では、授業における学習活動が、日常生活とどのようにつながっているのか、自分にとってどのような意味や価値があるのかを理解することが学習意欲に影響するのではないか。そのための支援環境の工夫はどうあるべきかを検討する必要性が教師間で共通理解された。

このような社会的背景と実践研究の経緯から、中学部段階にある知的障害生徒が活動への目的意識を持って仲間と協同しながら取り組み、学習意欲を向上させるための支援方法を考えていくことは重要であると考えられる。

そこで、本研究では、参加の質を高める授業改善の3つの視点の中の「活動への目的意識」に焦点を当て、活動への目的意識を向上させるための支援方法について、実践に基づき検討することを目的とする。具体的には、中学部在籍の知的障害生徒を対象に、清掃場面を取り上げ、清掃に関する知識・技能の獲得と遂行、協同する力、目的意識の向上を目的とした授業実践を行う。その実践によって得られた対象生徒の変容と、それをもたらした有効な支援方法を日々の記録から明らかにする。清掃場面における目的意識を、活動の終わりや手順がわかることを前提に、清掃に取り組む意味や価値がわかり、達成基準を意識してよりよく取り組むことと捉えた。

II. 方法

1. 対象生徒

特別支援学校中学部2年生の男子生徒A, B, C, Dの4名である。いずれの生徒も知的障害があり、4名のうち3名が自閉症の診断を受けている。田中ビネーV知能検査の結果は表1に示すとおりである。なお、4名の保護者には、年度始めに、研究対象にすることと個人情報の扱いについて説明し、同意を得た。

表1 田中ビネーV知能検査結果

	IQ	備考
生徒A	不明	知的障害
生徒B	58	自閉症
生徒C	56	自閉症
生徒D	37	自閉症

2. 支援計画

(1) 場面設定と重点課題

4名の生徒は、昨年度の清掃経験や技能面、生徒同士の間関係により、2人組に分けられ、清掃場所を廊下(A, B)、教室(C, D)とした。

清掃場所を廊下と教室にしたのは、次のような理由からである。廊下は、エリアを分担し両端から一定方向に掃き進めるため、ほうきの扱い方を覚えるのに適していると考えられたこと。また、廊下に置かれているルームランナーや台車等を動かして掃除機をかける場面を設定することで、二人で協同する必要性を意識できると考えたからである。教室は、机や椅子などの移動、エリアを分担し効率よく両端から掃くことなど、二人で協同して行うことを意識しやすいと考えたからである。

それぞれの清掃場所における活動を課題分析し、生徒の活動内容を設定した(図1～2)。活動内容は、生徒の清掃遂行状況から見直しを行い、追加したり、あるいは減らしたりするようにした。また、以下に示す重点課題を設定した。

廊下清掃

- ① 効率のよい掃き方を覚える。
- ② 物を移動させて掃除機をかける。
- ③ 協同して取り組む。
- ④ 時間を意識して清掃する。

教室清掃

- ① 物を移動させて清掃する。
- ② 協同して取り組む。
- ③ 汚れがたまる所に気を付ける。
- ④ 時間を意識して清掃する。

(2) 支援方針

廊下清掃で①を中心に指導したのは20XX年5月7日から20XX年6月16日まで、②については20XX年6月19日から20XX年10月30日まで、③については20XX年11月4日から20XX年11月28日まで、④については20XX年12月1日から20XX年2月23日までである。教室清掃で①を中心に指導したのは20XX年9月2日から20XX年11月5日まで、②については20XX年11月6日から20XX年12月5日まで、③については20XX年12月8日から20XX年2月3日まで、④については20XX年2月4日から20XX年3月3日までである。指導は、担任、副担任の2名で行った。支援方法は、次の3点とした(藤原, 2010)。

①物理的支援環境を整える。

②個のニーズに応じた支援(支援ツール)を充足する。

③教師による適切な人的支援環境を見直す。

最初に授業環境全体に関わる配慮を見直すこととした。具体的には、生徒が活動全体の見通しや目標を持ちやすくすること、活動しやすい動線を整理すること、教材等の物の配置や手掛かりの配置を工夫すること、教師の位置取りを見直すことである。

次に、全体への配慮に合わせて、個々の生徒がすべきことを理解して動くことができるようにするための支援を見直した。具体的には、活動を促すために、生徒自らが参照して活用できる自助具等を用意するなどである。そして、全体への配慮、個々の生徒に応じた物理的支援環境を十分に整えた上で、生徒の行動を促すために、効果的な教師の支援を検討した。例えば、教師による見本提示やプロンプトの方法、生徒の言動を意味付け、価値付けするためのフィードバックの方法、評価の基準やポイントを生徒にわかりやすく伝えるための工夫等である。具体的な支援方法は図1～2に示す通りである。

1) 活動機会と授業展開の工夫

清掃の前後に、目標確認場面、自己評価・他者評価場面を設けた。「目標確認」→「清掃」→「自己評価・他者評価」のサイクルを繰り返し、自己評価や教師からの評価を、次の目標設

定に生かせるようにした。生徒が清掃への目的意識をもち、意欲を向上させられると考えたからである。

「目標確認場面」では、清掃開始時に教師に目標を伝えるようにした。目標は手順チェックシートに設けられた目標欄に生徒が記述した。一枚のシートには、6日分記録できるようになっており、新しい手順チェックシートに変わる7日目に新しい目標を記述するようにした。

「自己評価・他者評価場面」では、手順チェックシートに記載されている項目を自己評価し、報告して教師から評価を受ける機会を設けた。

2) 目的意識と意欲を向上させるための支援

「目標確認場面」では、生徒が目標を伝えた後、目標を達成するための活動のポイントを口頭や視覚的に伝えるようにした。

「自己評価・他者評価場面」では、生徒の報告を基に、「～できたから、きれいになりましたね」といったように、達成されたこととその結果を伝えるようにし、結果に対する価値付けを行った。口頭での評価に加えて、手順チェックシートの評価欄に確認印と必要に応じて称賛やアドバイスなどのコメントも追記するようにした。

活動中は、生徒が自ら判断して取り組むことができるように、指導者は少し離れた位置で見守るようにした。指導者間で生徒の目標を共通理解し、具体的な支援方法も統一するようにした。また、重点課題に示した行動ができた場合には、口頭による賞賛を適宜行うようにした。

3) 協同を促すための支援

協同する必要性をわかりやすくするための活動を設定した。例えば、廊下に設置されている物の下に掃除機をかける、一人では運びにくい物を用意する等である。さらに、清掃の手順やポイントを生徒同士で共有できるようにするために、各自に用意された手順チェックシートを二人で共有させるようにし、互いにやり取りしながらチェック項目を確認できるようにした。

(3) 評価について

活動についての遂行状況は3段階で評価された。評価基準は1点~3点の点数で数値化し

た。基準は、3点：自ら行える、2：言葉かけが必要、1：言葉かけや指さし等の指示が繰り返し必要、である。評価は毎回、直接指導した指導者が行い、評価基準が一定になるようにするとともに、必要に応じて複数の指導者で評価内容を確認するようにした。さらに、手順チェックシートの目標欄に記述された内容の変化を、目的意識の変化を確認するための資料の一つとした。

Ⅲ. 結果

1. 廊下清掃（生徒A、B）

指導経過を図1に、目標欄の記述内容を表2に示す。

第1期（5月7日～6月16日）

最初に、大まかな清掃の手順を理解するための文字とイラストを使った手順チェックシートを用意した。Bは、ほうきの使用が不確実であったため、廊下を中央で区切り、端から一定方向に掃き進める方法で指導することとした。ほうきの持ち方や動かし方は手順チェックシートに書かれたイラストで示して指導した。また、指導者がモデルを示すようにし、徐々にモデルによるプロンプトを減らしていった。結果、6月上旬には、ほうきの扱いができるようになり、ゴミを集めることができるようになった。掃除機をかける場面では、両生徒のスキルに配慮して、Bがルームランナーや台車等（6か所）を移動させて、Aが掃除機をかけるという役割分担を行った。Bが物を移動させるのに時間が掛かったため、「早くして」「もう」など、Bの様子にいらだつAの発言が頻繁に見られた。

第2期（6月19日～10月30日）

手順チェックシートに目標欄を追加し、清掃開始前に指導者が生徒とともに、目標欄の記述を確認し、重点課題に関するポイントを説明するようにした。

掃除機をかける場面では、掃除機をかける場所を明確にするために、場所を写真で示すとともに、移動させる物に数字シールを貼って順番を示すようにした。Aのスキルは向上していっ

	第1期 (5/7~6/16)	第2期 (6/19~10/30)	第3期 (11/4~11/28)	第4期 (12/1~2/23)
重点課題	効率のよい掃き方を覚える。	物を移動させて掃除機をかける。	協同して取り組む。	時間を意識して清掃する。
活動内容	①ほうきで掃く。 ②掃除機をかける。 ランニングマシン等の下6か所 ③ごみを捨てる。(B) ④掃除機を片付ける。(A) ⑤ごみを確認する。 ⑥チェック項目を確認する。 ⑦報告する。	①目標を教師に伝える。 ②ほうきで掃く。 ③掃除機をかける。 ランニングマシン等の下6か所 ④ごみを捨てる。(B) ⑤掃除機を片付ける。(A) ⑥ごみを確認する。 ⑦チェック項目を確認する。 ⑧報告する。	①目標を教師に伝える。 ②ほうきで掃く。 ③掃除機をかける。 ランニングマシン等の下6か所 ④ごみを捨てる。(B) ⑤掃除機を片付ける。(A) ⑥ごみを確認する。 ⑦二人でチェック項目を確認する。 ⑧報告する。	①目標を教師に伝える。 ②ほうきで掃く。 ③掃除機をかける。 ランニングマシン等の下6か所 ④ごみを捨てる。(B) ⑤掃除機を片付ける。(A) ⑥ごみを確認する。 ⑦二人でチェック項目を確認する。 ⑧残り時間を記録する。 ⑨報告する。
支援方法	<活動全体の見通し> ○手順チェックシート <活動を促す手掛かり> ○ほうきの扱い方をイラストで提示する。(B) <教師による人的支援> ○基本的には離れて見守るが、必要に応じた言葉掛けやモデリング ○口頭と◎○△での評価とコメントの記述。	<活動機会の工夫> ○目標を教師に伝える活動を設ける。 ○目標記入欄を設ける。 <活動を促す手掛かり> ○掃除機をかける場所を写真で提示する。 ○動かす物に数字シールを貼っておく。 <教師による人的支援> ○目標達成のための活動のポイントを説明する。	<協同を促すための支援> ○手順チェックシートの項目を二人で一つにする。 <活動を促す手掛かり> ○清掃のポイント(困った時の対処やほうきの動かし方等)を記録した携帯情報端末を携帯する。(B)	<活動機会の工夫> ○手順チェックリストに残った時間を記入する欄を追加する。 <活動を促す手掛かり> ○終了時間の目安としてタイマーを15分セットする。
教師による評価				

評価の観点 3: 自ら行える 2: 言葉掛けが必要 1: 言葉掛け等の指示が繰り返し必要

下線部は、改善追加項目

図1 廊下清掃(生徒A, B)の指導経過と遂行状況

だが、台車の移動、延長コードの巻取りなどBにとって難しい活動をAが自分できるようになってしまい、Bへの関わりは減っていった。Bはほうきの扱いが雑になり、掃き残しが目立

つようになった。そのため、指導者が再度モデルを示すなどの指導が必要であった。移動させる物の順番を間違えることはなくなり、Aが来るのを待っている様子が見られた。

表2 目標欄とコメントの記述内容

	第1期 (5/7~6/16)	第2期 (6/19~10/30)	第3期 (11/4~11/28)	第4期 (12/1~2/23)
重点課題	効率のよい掃き方を覚える。	物を移動させて掃除機をかける。	協同して取り組む。	時間を意識して清掃する。
目標欄の記述内容	<p><生徒A> <生徒B> ・目標欄なし</p>	<p><生徒A> ・Bさんに声をかける。 ・ほうきのつかいかた。 ・Bさんにもっと声をかける。 ・物をのけてそうじきですう。 ・やさしく声をかける。</p> <p><生徒B> ・自分でチェック (*手順チェックリストの付け忘れがないようにする。) ・ほうきの使い方 ・教室の方にはく。</p>	<p><生徒A> ・困っていたら手伝う。 ・チェックのかくにんをする。 (*Bにチェック項目ができたかを確認する) ・かくにんをがんばります。</p> <p><生徒B> ・手伝ってくださいを言う。 ・iPodのチェックらん (*携帯情報端末に登録されたポイントを確認すること)</p>	<p><生徒A> ・Bさんにかくにんをがんばる。 ・協力してがんばります。</p> <p><生徒B> ・iPodのチェックらん ・3分いないにする。 (*残り時間を) ・すばやくがんばります。 ・もくひょうじかんまでにおわらせる。</p>
教師のコメント記述	<p>・コードの片付けをがんばりましょう。</p>	<p>・やさしく声をかけましょう。 ・教室の方にはききましょう。 ・しっかり押さえてはきましょう。</p>	<p>・「手伝ってください」おたがいに声をかけ合う。 ・ゴミ捨てがあるかどうかを先生に確認しましょう。 ・声をかけ合っています。 ・きちんとチェックできています。 ・一つずつチェックを忘れないように</p>	<p>・ていねいにできました。</p>

Aの目標欄には、「物をのけてそうじきですう」「Bさんに声をかける」「やさしく声をかける」など、協同することに関する記述が見られた。Bの目標欄には、「自分でチェック」「ほうきの使い方」「教室のほうにはく」など、技能面に関する記述が見られた。

第3期 (11月4日~11月28日)

それぞれに用意していた手順チェックシートを二人で共有するようにした。加えて、Bには、手順や活動のポイント(ほうきの扱い方、困った時の対処法等)を登録した携帯情報端末を用意した。使用した携帯情報端末はiPod Touchである。活動のポイントは状況に応じて

追加修正を行った。チェック項目の確認は、A主導で行われた。「~はできましたか」「はい」といったやり取りに加え、Bが携帯情報端末の画面を見せる様子も見られるようになった。Bが携帯情報端末のチェックを忘れることがあったため、意識しやすいように、首から下げて使用するよう指導した。掃除機をかける際には、(A)「手伝おうか」(B)「手伝ってください」といったやり取りが見られるようになった。

Aの目標欄には、「困っていたら手伝う」「チェックのかくにんをする」「かくにんをがんばる」の記述が見られた。Bの目標欄には、「手伝ってくださいを言う」「iPodのチェックらん」

の記述が見られた。

第4期（12月1日～2月23日）

清掃のスキルも向上し、協同での作業もできるようになってきたことから、時間を意識することができるようにするために、目標タイムを設定し、手順チェックシートに残り時間を記入する欄を設けた。目標タイムについては、前回の記録を参考にして生徒と相談して決めるようにした。その際、早くなり過ぎないように、生徒のスキルで余裕をもって清掃できる時間になるように配慮した。両者ともにタイマーセットと残り時間の記入を実行することができた。報告時には、「3分残った」「今日は〇分」と達成基準を意識した発言が見られるようになった。

Aの目標欄には、「協力してがんばります」、Bの目標欄には、「3分いないにする」「すばやくがんばります」「もくひょうじかんまでにおわらせる」といった、時間を意識した内容や、早くするためには協同することが必要だと気づき、それを表現した内容の記述も見られた。

1. 教室清掃（生徒C、D）

活動内容の遂行状況の経過を図2に、目標欄の記述内容を表3に示す。

（1）第1期（9月2日～11月5日）

清掃の手順を理解するために、文字による手順チェックシートを用意した。ほうきの扱いは両生徒ともできたが、エリアを分担して清掃することが理解できておらず、同じ所を二人が掃くなど、効率は悪かった。そこで、机等の物を移動させ、物が無い状態で、両端から掃き進め、真ん中でごみを集める手順に変更した。掃き方については、床に数字シールを貼って掃く順番を示して理解を促した。また、ホワイトボードにほうきを動かす向きと進んでいく方向を矢印で示すとともに、前方で指導者がモデルを示しながら指導した。両生徒ともに床に貼られた数字シールと教師のモデル提示を手掛かりに、教室清掃の手順を理解できるようになった。

机や台を持ち上げる際に、机上や中の物を落

としてしまうことが多かったため、机上の物や机の中の物を落とさず移動させて清掃することを重点課題とした。Cは、落とさずに移動させることができたが、Dはできなかったため、目標確認場面で、机の持ち方を写真で提示して、確認するとともに、実際に机を持たせて指導するようにした。その結果、9月末には机の持ち方を意識して運べるようになり、物を落とすことは少なくなった。また、一人では持ちにくい大きな台は二人で協力して運ぶ様子が見られるようになったが、それ以外は、自分の担当する物を運び終えると、手伝うことはなく、相手が終わるのを待っていたり、先に次の活動に移ったりしていた。

Cの目標欄には、「向きを気を付ける」「チェック表を机の中に入れる」など、机の運び方を意識した記述が見られた。それまで目標欄に記述がなかったDについても、机の向きを示した写真を手掛かりに、「つくえのむき」と記述する様子が見られるようになった。

（2）第2期（11月6日～12月5日）

二人で協同することを重点課題として、移動させなければならない物を増やした。誰が何を運ぶのかを決めずに、机等の配置を写真で示した教室完成図を用意し、両生徒に考えさせるようにした。また、各自に用意されていた手順チェックシートを二人で共有するようにした。結果、Cから、「Dさん、次は台を運びます」などのやり取りが増え、協力して物を運ぶ様子が見られるようになった。また、Cからの「～できましたか」の問い掛けに、Dが「はい」と答えるやり取りが見られるようになった。

Cの目標欄には、「Dさんと台を2つさげる」という相手を意識していると考えられる目標が書かれるようになった。Dについては、第1期から引き続き、「つくえのむきにきをつける」「いすを6こはこぶ」と書いており、協同に関する記述は見られなかった。

（3）第3期（12月8日～2月3日）

普段、あまり生徒が意識していない箇所を清掃することを重点課題とした。手順チェックシートにパソコンデスクの下やゴミ箱の下等、

	第1期 (9/2~11/5)	第2期 (11/6~12/5)	第3期 (12/8~2/3)	第4期 (2/4~3/3)
重点課題	物を移動させて清掃する。	協同して取り組む。	汚れがたまる所に気を付ける。	時間を意識して清掃する。
活動内容	①目標を教師に伝える。 ②机いす、台を運ぶ。 ③ほうきで床を掃く。 ④塵取りでごみを集める。 ⑤机いす、台を元に返す。 ⑥ごみ捨てをする。 ⑦ごみを確認する。 ⑧チェック項目を確認する。 ⑨報告する。	①目標を教師に伝える。 ②窓を開ける。 ③机いす、台を運ぶ。 ④ほうきで床を掃く。 ⑤塵取りでごみを集める。 ⑥机いす、台を元に返す。 ⑦ごみ捨てをする。 ⑧ごみを確認する。 ⑨窓を閉める。 ⑩二人でチェック項目を確認する。 ⑪報告する。	①目標を教師に伝える。 ②窓を開ける。 ③机いす、台を運ぶ。 ④ほうきで床を掃く。 (<u>ごみ箱の下, ロッカーの下, パソコンの下</u>) ⑤塵取りでごみを集める。 ⑥机いす、台を元に返す。 ⑦ごみ捨てをする。 ⑧ごみを確認する。 ⑨窓を閉める。 ⑩二人でチェック項目を確認する。 ⑪報告する。	①目標を教師に伝える。 ②窓を開ける。 ③机いす、台を運ぶ。 ④ほうきで床を掃く。 (<u>ごみ箱の下, ロッカーの下, パソコンの下</u>) ⑤塵取りでごみを集める。 ⑥机いす、台を元に返す。 ⑦ごみ捨てをする。 ⑧ごみを確認する。 ⑨窓を閉める。 ⑩二人でチェック項目を確認する。 (<u>時間の記録</u>) ⑫報告する。
支援方法	<活動全体の見通し> ○手順チェックシート ○活動を促す手掛かり ○床に数字シールを貼り、掃く順番を示す。 ○掃く方向を矢印で示す。 ○机の運び方を写真提示 <教師による人的支援> ○モデル提示 ○口頭と◎○△での評価とコメントの記述。	<協同を促すための支援> ○移動させた物を元に返すための手掛かりとして、机等の配置を写真で提示した教室完成図を用意する。 ○チェック欄を二人で一つにする。 <教師による人的支援> ○基本的には離れて見守る修正時に言葉掛けをする。	<活動を促す手掛かり> ○活動のポイントとして、 <u>汚れがたまりやすい場所を、手順チェックリストに追加する。</u> *Dには、場所を写真カードで示し、ほうきに携帯しておく。	<活動機会の工夫> ○活動のポイントとして目標タイムを設定し、 <u>手順チェックリストに掛かった時間を記入する欄を追加する。</u> <活動を促す手掛かり> ○タイマーを用意する。
教師による評価	<p>生徒C (実線) 生徒D (点線)</p>			

評価の観点 3：自ら行える 2：言葉掛けが必要 1：言葉掛け等の指示が繰り返し必要

下線部は、改善追加項目

図2 教室清掃（生徒C、D）の指導経過と遂行状況

表3 目標欄とコメントの記述内容

	第1期 (9/2~11/5)	第2期 (11/6~12/5)	第3期 (12/8~2/3)	第4期 (2/4~3/3)
重点課題	物を移動させて清掃する。	協同して取り組む。	汚れがたまる所に気を付ける。	時間を意識して清掃する。
目標欄の記述内容	<p><生徒C></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごみが落ちていないかチェックする。 ・向きに気を付ける。 ・チェック表を机の中に入れる。 ・先に机を下げる。 <p><生徒D></p> <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし (9/2~10/9) ・つくえのむき ・つくえのむきにきを付ける。 	<p><生徒C></p> <ul style="list-style-type: none"> ・台を2つ下げる。 ・Dさんと台を2つ下げる。 ・まどをあけるのをがんばる。 <p><生徒D></p> <ul style="list-style-type: none"> ・つくえのむきにきを付ける。 ・いすを6こはこぶ。 	<p><生徒C></p> <ul style="list-style-type: none"> ・まどをあけるのをがんばる。 ・ロッカーの下をはく。 ・ゴミ箱の下をはく。 <p><生徒D></p> <ul style="list-style-type: none"> ・つくえのむきをきを付ける。 ・パソコンのしたをはく。 ・まどをあける。 ・ごみばこの下をはきます。 	<p><生徒C></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごみすてをがんばる。 ・ロッカーの下をはきます。 <p><生徒D></p> <ul style="list-style-type: none"> ・パソコンのしたをはきます。 ・ごみばこの下をはきます。
教師のコメント記述	<ul style="list-style-type: none"> ・机の上の物を元にもどしましょう。 ・台の位置を覚えましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・台の位置に気を付ける。 ・窓を忘れずに閉めることができました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・物の下もはけています。 	

汚れがたまりやすい場所を清掃場所の項目として追加した。Dには、汚れがたまりやすい場所を写真カードで示し、いつでも確認できるようにほうきにつけた。目標確認場面では、汚れている場所について手順チェックシートの項目を確認しながら伝えるようにした。追加された場所の清掃に時間を要することがあったものの、1月上旬には、手順チェックシートの項目を達成することができるようになった。

目標欄には、「ロッカーの下をはく」「パソコンのしたをはく」等、C、D共に重点課題に関わる内容の記述が見られた。

(4) 第4期 (2月4日~3月3日)

目標タイムを設定した。目標タイムは、これまでの清掃にかかった平均時間と、両生徒のスキルから判断して十分可能だと考えられた15分とした。タイマーセットや掛かった時間の記録はCが行った。遂行状況に問題はなかったが、

目標欄には時間に関わる目標の記述は生徒C、D共に見られなかった。

IV. 考察

4名の生徒全員が、6か月後、10か月後には重点課題(技能、協同等)に関わる目標を達成できたと評価された。目標欄の記述内容については、どの生徒も重点課題に関わる内容の記述が確認された。これは、活動への目的意識をもつことができた結果と考えることができる。このような変容をもたらした支援のポイントが何であったのかを考察する。

<指導する際の順序性>

本実践では、大まかな手順を指導し、その後、協同する場面の設定や時間の設定などを指導した。技能の向上を積み上げて掃除ができるようにするというボトムアップ的な指導ではな

く、掃除の流れを指導してから細かい点を指導するというトップダウン的な指導をしたということである。手順を指導する際には、物理的な環境整備と視覚的な支援を行った。生徒の目標の欄に課題を意識した内容が書かれていることから、指導者の意図したとおりに指導が進んだことがわかる。このような指導は、生徒に達成感を味わわせることになり、活動への目的意識も持ちやすくなったのではないかと考えられる。大まかな手順を指導してから、実態に応じた細かいスキルを指導することが、目的意識を促す上で重要になるということである。

<協同を促すための支援>

生徒同士で協同して取り組むためには、手順や活動内容を生徒間で情報共有することが効果的であった。そのためには、先に述べたように手順を大まかにでも理解していることは重要であった。手順の情報共有で、二人で手順チェックシートを共有するようにしたからである。手順表の共有は自己評価時の生徒同士のやり取りの促進にもつながった。また、活動内容の情報共有では、掃除機をかける場所とその順序、移動させる物と元に戻すための配置図を視覚的に提示することで、生徒が二人で相談しながら取り組む様子が見られたことから、生徒同士が理解できる情報の提供方法と話し合いができるような環境の設定が重要であった。指導初期に手順が理解できるように指導したため、清掃の終わりがイメージしやすくなり、目的意識が持てるようになったことが、協同での作業を可能にしたのではないかと考えられる。

<目的意識と意欲は向上したか>

生徒の目標が徐々に具体的な達成基準を意識したものになっていることから、生徒は目的意識を向上させることができたのではないかと考えられる。その背景には、清掃の前後に、「目標確認場面」「自己評価・他者評価場面」を設定したことがあげられる。廊下清掃では第2期から、教室清掃では第1期から、目標確認→実践→自己評価・他者評価のサイクルを繰り返す授業展開としてきた。協同作業での課題は、自分一人では遂行が不可能な課題であり、そこ

では協力することが求められる。そうすると必然的に他者からの評価が生じる。やるべきことが分かっており、課題遂行にお互いの協力がなければならぬので、他者からのよい評価が得られるように、課題に取り組まなければ、清掃が終了しないのである。上記のサイクルを繰り返し行ったことが、目的意識を向上させたことにつながったのではないかと考えている。「他者評価場面」において、コメントの記述以外に、教師の口頭でのフィードバック等を確認できる客観的なデータがないため、生徒の目標設定と、指導者のフィードバックとの関連は明らかにすることはできなかった。しかし、指導者からの評価は生徒の活動に影響を与えているはずである。今後、指導者が生徒の活動に対してどのような方法で意味付けを図り、どのような方法で価値付けを行っているのかを、詳細に見ていくことができるように、ビデオ分析などでもできるような方法を考えていきたいと思っている。さらなる実践を積みかねて、生徒の活動意欲を向上させるための効果的な支援を整理し明らかにしていきたいと考えている。

付記

本研究は、香川大学教育学部・附属学校園共同研究機構が行う2014年度の学部教員と附属学校園教員による共同研究プロジェクトの一環として実施した。

引用・参考文献

- 文部科学省・中央教育審議会初等中等教育分科会 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)
- 全国特別支援学校知的障害校長会 (2013) 知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き 実践編 - 小中高の系統性のある実践 -。ジヤース教育新社。
- 山内雅子・坂井聡 (2010) 主体的な社会参加をめざした授業づくり②ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点として - 知的障害特別支援学校 中学部「パワーアップタイム」の授業実践を通

して－. 日本特殊教育学会第48回大会発表.

西部良二・山内雅子・坂井聡 (2011) 主体的な社会参加をめざした授業づくり②ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点として－知的障害特別支援学校中学部「パワーアップタイム」の授業実践を通して－. 日本特殊教育学会第49回大会発表.

山内雅子・妹尾恭子・田中伸弥・坂井聡 (2012) 主体的な社会参加をめざした授業づくり②参加を高め, 知識・技能を活用する力を育むことを視点として－知的障害特別支援学校中学部「数学科」の授業実践を通して－. 日本特殊教育学会第50回大会発表.

山内雅子・植村伊裕・詫間克久・坂井聡・宮崎英一 (2013) 主体的な社会参加をめざした授業づくり②参加を高め, 知識・技能を活用する力を育むことを視点として－知的障害特別支援学校中学部「数学科」の授業実践を通して－. 日本特殊教育学会第50回大会発表.

藤原義博 (2010) 子どもがわかって動ける授業づくり－個のニーズに応じた包括的支援－. 実践障害児教育, 2010, 7, 34-35.

藤原義博 (監修著)・小林真・阿部美穂子・村中智彦 (編著)・富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 (2012) 特別支援教育における授業づくりのコツ－これならみんなわかって動ける. 学苑.